

高校「倫理」教科書におけるインド仏教 —特に部派・大乘—の記述について

江 田 昭 道

1. 本稿の目的 現在、公立学校で特定の宗派のための宗教教育を行うことは禁止されている。しかし、宗教に関係する事柄自体は、高等学校の科目「倫理」などにおいて取り扱われている。本稿では、東書・実教・一橋・教出・清水・山川・数研・第一という 8 社の「倫理」教科書を取り上げ、そこに見られるインド仏教—特に部派仏教・大乘仏教—の記述を検証する¹⁾。

2. 学習指導要領での位置づけ 『高等学校 学習指導要領』（平成 15 年 12 月一部改正）の中で、インド仏教は、科目「倫理」のうち、「人間としての在り方生き方」を考えさせる中単元において取り扱われている。また、『高等学校学習指導要領解説 公民編』（平成 17 年 1 月一部補訂）は、釈尊の言行を適宜取り上げるように指示する一方、部派仏教・大乘仏教については、何の指示も与えていない。そのため、部派仏教・大乘仏教を授業で取り扱う位置づけは不明確であり、一橋のように、部派・大乘を扱わない教科書もある。

3. 具体的な記述の検証 本節では、一橋を除く 7 社の教科書における部派仏教・大乘仏教に関する記述を検証する。

3.1. 部派仏教の位置づけ 各教科書は、根本分裂の原因について、教え・戒律の解釈の相違など²⁾を挙げている。

多くの教科書は、部派仏教において、自己の悟りのみを求める「阿羅漢」が理想とされていたと述べ、自らを含む一切の衆生の救済を目指す「菩薩」が大乘で理想とされたことと対比している³⁾。また、「阿羅漢」の自己の悟りのみをめざす姿勢は、もう一方で、釈尊の「慈悲」重視の姿勢⁴⁾と間接的に対比されていることも見て取れる。多くの教科書は、「阿羅漢」を理想とし、自らの悟りを求める出家者中心の部派仏教像を描くのに止まっているが、清水 (pp.53-54) と数研 (p.46) は、部派仏教が聖典の編纂・整備や釈尊の教えの体系化を成し遂げたことも紹介している。

清水 (p.54)・山川 (p.50 注 1)・数研 (p.46 注 2) は、上座部 (系) の部派が「小

(2) 高校「倫理」教科書におけるインド仏教—特に部派・大乘—の記述について (江 田)

乗仏教」であると解説を加えている。一方、東書 (p.63 注 1)・実教 (p.42)・清水 (p.54)・山川 (p.50 注 1)・第一 (p.55) は「小乗仏教」という呼称に言及するが、上座部との関係は明示しない。なお、いずれの教科書も「小乗」という呼称が大乘仏教側の視点からのものであることを断わっている。

3.2. 大乘仏教の位置づけ まず、「大乘仏教」が、「釈尊の教説」とどのように関係付けられているのかを検証する。教出を除く 6 つの教科書で、大乘仏教と釈尊の教説との関係が言及されているが、いずれの教科書も大乘仏教が釈尊の慈悲の精神を受け継いだと述べている⁵⁾。そのうち、実教 (p.43) は、大乘仏教が「ブッダの慈悲にもとづく衆生の救済」を説いただけでなく、釈尊の教えに基づいて、「空の思想を発展させた」と説明している。

次に、「大乘仏教」が「部派仏教」に対してどのように関係付けられているのかを検証する。実教 (p.42 注 1)・清水 (p.54)・数研 (p.46)・第一 (p.55) は、大乘仏教が部派仏教の部派の一つ「大衆部」の流れを汲むものと位置づける⁶⁾が、多くの教科書は大体、以下のように大乘と部派を対照させている。

	大乘仏教	部派仏教
担い手	在家信者中心	出家者中心
理想像	菩薩	阿羅漢
重視するもの	利他 (他者の救済・慈悲)	自利 (自己の解脱)

もっとも、それぞれの項目については、若干の記述の幅が認められる。大乘の「担い手」について、多くの教科書は、部派仏教が出家者中心であるのに対して、大乘は在家信者中心であると記述する⁷⁾が、清水 (p.54) と第一 (p.55) は、在家信者の関わりに言及しない⁸⁾。大乘の理想像「菩薩」は、先述したとおり、「自利」を重視する「阿羅漢」と対比され、「利他」を重視する存在として紹介されることが多い⁹⁾。菩薩が、自らのさとりという「自利」も追求することには言及しない教科書もある¹⁰⁾。なお、7 つのうち、5 つの教科書では、菩薩の行いとして「六波羅蜜」の実践が言及されている¹¹⁾。

3.3. 大乘仏教の思想—日本仏教へのつながり 本項では、大乘の哲学・思想などがどのように述べられているかを検証する。

全ての教科書において、「空の思想」が大乘仏教の思想であり、ナーガールジュナによってその思想が大成されたと述べられている。また、多くの教科書では、ヴァスバンドゥの「唯識の思想」も紹介されている¹²⁾。しかし、これらの思想の解説は数行程度にとどまっている。この他、幾つかの教科書は、「一切衆生悉

高校「倫理」教科書におけるインド仏教—特に部派・大乘—の記述について（江 田）(3)

有仏性」,「即身成仏」などの思想も紹介している¹³⁾。これは,それぞれの思想を,日本の天台宗・真言宗へとつなげることを意図していると思われる¹⁴⁾。この他,釈尊の思想として取り上げられる「縁起」の解説などに,大乘的な要素が見られることもある¹⁵⁾。

また,全ての教科書において,インド以外への仏教の展開が図表などで示されている¹⁶⁾。そこでは,大乘仏教が北方の中国・朝鮮半島・日本に伝わり(北伝仏教),上座部仏教が東南アジアに広まった(南伝仏教)ことが示されている。一部の教科書は,チベット¹⁷⁾への伝播を,北伝仏教(あるいは大乘仏教)とは異なる印で示している¹⁸⁾。インドでの仏教の衰亡については,東書(p.64)と第一(p.56)が簡単に触れているのみである。東書(p.64)はまた,「仏教系統図」を出して,原始仏教から日本仏教への流れを図示している。なお,第一(p.56)は「東アジアの仏教」という項を設け,日本に伝わった仏教の諸流派を「中国で変容した」ものであると解説している。

4. 現代社会における仏教の意義 最後に,仏教と現代社会との関わりを各教科書がどう提示しているのかを簡単に見ておきたい。

多くの教科書は,生きとし生けるもの全てに及ぶ慈悲の平等性を強調している。そのうち,一橋(p.29)と数研(p.45)は,人間の優越性を前提とする「西洋近代文明」による環境破壊と慈悲の思想を対比し,環境保護思想における「慈悲」の重要性を強調している。それに対し,第一(p.57)は,「一切衆生悉有仏性」の教えによって仏教の平等思想的側面を指摘し,この教えを,人間の特権を主張するユダヤ教・キリスト教などの思想と対置して,自然破壊について「仏教の教えからもう一度考えなおすこと」を求めている。また,清水(p.47)は,環境破壊にとどまらず人口の高齢化などの問題に対しても,仏教の教えには多くの学ぶべきところがあると述べている。なお,実教(p.41)は,『ダンマパダ』第5偈(?)¹⁹⁾および第129偈を引用し,仏教を「暴力否定・生命尊重・平和志向」の思想として特徴づけ,「他の生物との共生を問われているこんにち,改めて注目に値するであろう」と述べている。

この他,第一(p.57)は,上述した環境問題だけにとどまらず,葬式という儀式を取り上げ,「人の死の意味が見えなくなりつつある今日,葬式という儀式がもつ意味を問うことで,死とは何か,人生とは何かをあらためて考えることができるのではないだろうか」とも述べている。

(4) 高校「倫理」教科書におけるインド仏教—特に部派・大乘—の記述について (江 田)

- 1) 本稿を草するにあたり、駒場東邦高等学校より教科書を貸与していただいた。感謝いたします。なお、学習指導要領の記述や原始仏教の記述の検証については、『浄土真宗総合研究』第4号に掲載予定の別稿に譲る。各教科書の書誌情報・略号についても、別稿を参照。
- 2) 教え:実教 (p.42)・清水 (p.53)・数研 (p.46)。戒律:教出 (p.93)。東書・山川には、原因の記述が無い。なお、第一 (p.55) は、教えの中の「自利」と「利他」という方向性の違いが根本分裂の原因 (!) であるとする。
- 3) 東書 (p.63)・教出 (p.93)・清水 (p.54)・数研 (p.46)。実教 (p.42) と山川 (p.50) は「部派仏教」を説明する際、「阿羅漢」に言及しない。第一は、「阿羅漢」にも「菩薩」にも言及しない。
- 4) 高校「倫理」教科書における釈尊の「慈悲」に関する叙述については、注1で言及した別稿を参照。
- 5) 東京 (p.63)・実教 (p.43)・清水 (p.54)・山川 (p.50:一方、上座部は自力救済の精神を受け継いだとする)・数研 (p.46)・第一 (p.55)。
- 6) 教出 (p.93 注3) は、大乘仏教運動と出家者とのつながりを示唆しながらも、その部派名を特定していない。
- 7) 東書 (p.63:「一般民衆ならびにその指導者であった説教師」)・実教 (p.42:「在家の信者を中心」,「大衆部系統の部派には、のちの大乘仏教の先駆とみられる教えを説くものもあった」(注1))・教出 (p.93 注3:「ゴータマの遺骨を納めたとされる仏塔の信仰など、在家信者としての戒律・信仰を守っていた人々が中心となり、一部の部派の僧たちと結びついて大きな運動となった」)・山川 (p.50 注2:「大衆的な新しい仏教運動」,在家信者中心であることを示唆)・数研 (p.46:「革新仏教の信者たち」,「他者の救済を軽視するように見え」る,部派仏教の出家者と対比)。このように、幾つかの教科書は、出家者が指導的な役割を果たしたことにも言及している。大乘仏教在家起源説への疑義については、例えば、佐々木閑、『インド仏教変移論—なぜ仏教は多様化したのか』,大蔵出版,2000, pp.307-334 を参照。
- 8) 清水 (p.54) は、「大衆部に根ざした布教師など」が母体となったとのみ記す。第一 (p.55) は、「利他行を説く流派」の中から大乘仏教が生まれたと記す。
- 9) ただし、「菩薩」という語は、実教 (p.42) や数研 (p.46) の教科書も注記している通り、大乘が起こる前から用いられていた言葉であり、「大乘のさとりを求めるもの」(下線部筆者,第一 p.57) という限定は不適當である。また、後代の浄土教などへの展開を考えると、実教 (p.42) や数研 (p.46) の教科書が挙げている、「ブッダになることを誓う」という定義も重要であるが、他の教科書では、言及されていない。
- 10) 東書 (p.63)・実教 (p.42)・教出 (p.93)・清水 (p.54)・第一 (p.57:自利と利他は不二であるとする) は菩薩の「自利」にも言及するが、山川 (pp.50-51) と数研 (p.46) には「自利」への言及がない。なお、部派仏教においても、「利他」が説かれることはある。阿含經典などにおける自利・利他の位置づけについては、L. Schmithausen, “Benefiting oneself and benefiting others: A Note on *Āṅguttaranikāya* 7.64”, *Gedenkschrift J. W. de Jong*, The International Institute for Buddhist Studies, 2004, pp. 149-154 を参照。
- 11) 東書 (p.64)・実教 (p.42)・教出 (p.93)・清水 (p.54)・第一 (p.57) を参照。山川と数研では、全く言及されていない。第一 (p.57) は、「今に生きる仏教の教え」という節の中に「慈悲の実践」という項目を立て、六波羅蜜が慈悲の理念にもとづいて説かれたと強調しているが、典拠は不明である。なお、

高校「倫理」教科書におけるインド仏教—特に部派・大乘—の記述について（江 田）(5)

中村元,『慈悲』,平楽寺書店,1956,p.69では、『ラトナーヴァリー』の漢訳『宝行王正論』4.80前半を,「施しと戒と忍ぶことと精進と〔禅〕定と智〔慧〕とは〔慈〕悲を体となす」(下線部筆者)と読んでいる.しかし,実際には,「施しと戒と忍ぶことと精進と〔禅〕定と智〔慧〕と〔慈〕悲を体となす〔仏説である大乘は・・・〕」と読むべきである.Y. Okada, *Nāgārjuna's Ratnāvalī, Vol. 3. Die chinesische Übersetzung des Paramārtha*, Indica et Tibetica Verlag, 2006, p.195 も参照.

12) 東書(p.64)・清水(p.54)・山川(p.51)・数研(p.47)・第一(p.56). 実教(p.43)は,ヴァスバンドゥの名前に言及するものの,「唯識」という語を出さない. 13) 東書(p.64)・清水(p.54:2つの言葉そのものは登場しない)・数研(p.47). 14) 東書(p.64)と清水(p.54:前注参照)の教科書は,日本仏教の天台・真言宗の箇所を参照するように指示している. 15) 注1で言及した別稿を参照. 16) 東書(p.63)・実教(p.43)・教出(p.93)・清水(p.55)・山川(p.51)・数研(p.47)・第一(p.55). 17) 清水(p.55)は,図中でチベット仏教に対して「ラマ教」という俗称をカッコ書きで用いているが,現在この呼称は適切でないとされている.なお,東書(p.64)の「仏教系統図」の中でも「ラマ教」という呼称がカッコ書きで用いられている. 18) 教出(p.93)・清水(p.55)・数研(p.47). 山川(p.51)は,「大乘系統」として北方に伝わったものと同じの印で表している.また,実教(p.43)は,チベットへの伝播について注記を加えていない.チベットからモンゴルへの伝播については,東書(p.63)・教出(p.93)・清水(p.55)・数研(p.47)・第一(p.55)が「北伝」とは違う印で記している.なお,第一(p.55)は,チベット仏教について「固有の民間習俗と融合して独自の展開をとげた」と述べ,「現在でも初期の形態の仏教を守っているとされる」上座部仏教と対比している. 19) 「うらみを捨てること」と述べられているのは,『ダンマパダ』第5偈の引用だと考えられる.なお,原文では,実教が示すような,「慈悲」の実践との関係は明示されていない.

〈キーワード〉 ナーガールジュナ, ヴァスバンドゥ, 宗教教育, 学習指導要領, 教科書, 環境問題

(浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員, Dr. Phil.)